

# 琉球大学学術リポジトリ

古代日本語〈ータリ〉の〈-eba 条件形〉：  
『源氏物語』の語り文の条件づけ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2019-04-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大胡, 太郎, Ohogo, Tarou メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/44234">http://hdl.handle.net/20.500.12000/44234</a>

# 古代日本語〈-タリ〉の〈-eba 条件形〉－『源氏物語』 の語り文の条件づけ－

〈-tari〉 form in 〈-eba conditioning form〉 of ancient Japanese language – condition form in narrative discourse of “Genji monogatari”

大胡太郎

はじめに

物語文学作品の場面の中の時間は基本的に「非過去時制」によって描かれる。しかし、言うまでもなく物語全体が「過去」のことであるという前提が崩れることはなく、いちいちのセンテンスにおいては明示する必要がある時にのみ「過去時制」を伴ったセンテンスが現れる、という基本的な傾向が指摘できる。

この「過去時制」表現の排除傾向のため、いちいちの場面では、基本的にセンテンス相互のタクシス関係と、アスペクト、パーフェクト、インパーフェクトを表すサフィックスを伴った表現によって時間は進行する。このため、ひと続きの場面内でも「時間」は〈過去／現在／未来〉と言うより〈先行・後続〉と〈同時〉というアスペクトの原則に従っていることになる。

さらにひと場面の中では、複雑な出来事関係や人物関係を描くために、〈先行・後続／同時〉という原則的時間だけでなく、シンプルな「過去時制」表現を用いずに、時間を遡った「過去」が語られて、その場面の「現在」の出来事や人物に関係づけられることもしばしばあり、「エピソード」や「場面」はフラッシュバックする。あるいはフラッシュフowardさえる。しかし、このことは時間的秩序としての〈先行・後続／同時〉〈フラッシュバック〉などが「時間」表現のためだけにあることを意味しない。

本稿では、時間的に〈先行〉する出来事が、〈原因〉や〈理由〉、〈契機〉といった「意味」を付与された「条件づけ」へと移行してつきそい文となり、「条件づけられた」いいおわり文との関係を表現するつきそいあわせ文を、分析の対象とする。

つきそい文に、その場面の中にはない「過去」の出来事や人物や、その人物のエピソードが想起され、あるいは「未来」のある時点における出来事の成立が話し手によって想像され、その出来事成立時点以降に起こる、あるいはその出来事を〈原因〉や〈理由〉や〈契機〉として起きることを描きだすつきそい・あわせ文をいくつか取り上げ、つきそい文のアスペクト／パーフェクト・インパーフェクトのサフィックスをともなうつきそい文の条件形がどのようなテンポラリティーを構成し、かつそれがどのような条件づけへと移行しているかの分析を試みたい。また、それが、語り手によるナラティブディスコースやストーリー・テリングに関わる問題をいくつか析出し分析する。そしてさらに、今後は、発話する人物や場面、さらにはストーリーに対して持つ意味もさぐっていききたい。

なお、本稿をなすにあたっては、既に本学科卒業論文として、崎間祐賀子「古代日本語における条件づけを表現するつきそい・あわせ文 一つきそい文の述語が -eba の場合」、砂川すみれ「古代日本語における条件づけを表現するつきそい・あわせ文 一つきそい文の述語が -aba となる場合」（2017 年度本学科卒業論文）という優れた成果があり、多くをこれに学んだ。そのさいに、物語文学の場面の中で語りの問題にクロスする多くの領域とヒントを得た。これを素描することを、本稿の目的とする。

### パーフェクトをあらわす〈-タリ〉の〈-eba 条件形〉

まず、想定される「典型」として、〈-タリ〉というパーフェクトを表す形を取り上げる。〈-eba 条件形〉のつきそいあわせ文のつきそい文において〈-タリ〉は〈-タレバ〉のかたちをとる。

ひとえ文の動詞述語文において、〈-タリ〉形はパーフェクト、すなわち「テンポラルセンターに先行する、語彙的意味の完成」と「後続する段階＝

〈効果〉」、および「メノマエ性」をあらわす。このとき場面内の時間に対し、後続する時間、すなわち「そして、それから」という継起的前進を生み出すというテキスト的機能がある。

#### (1) 場面内の時間の継起的前進の出発点となる場合

語り文、会話文・心中思惟文にかかわらず、多くの〈一タレバ〉の表すつきそいあわせ文においては、前文のしめす内容、すなわち、継続している、あるいは結果としての〈状態〉がしめされ、そこにあらたに生じた出来事や認識などをさしだすつきそい文として、いいおわり文にとつての〈原因〉〈理由〉〈契機〉としてはたらく。

##### 1) 【薫、浮舟の心をはかりかねて、思い迷う】

いつしかと待ちおはするに、かくたどどしくて帰り来たれば、すさまじく、なかなかなり、と思すことさまざまにて、人の隠しすゑたるにやあらむと、わが御心の、思ひ寄らぬ隈なく落しおきたまへりしならひにとぞ、本にはべめる。(源氏・夢の浮橋 381)

訳) 今か今かとお待ちになっていらっしやるところへ、こうして不確かなことで帰ってきたので、大将はおもしろからぬお気持ちになられて、なまじ使いをやらなければよかったと、あれやこれや気をおまわしになって……

『源氏物語』最後の「夢の浮橋」巻の巻末である。浮舟のもとに使いを送った薫が「待ちおはする」という継起的な状態に、使いがはかばかしい返事も得られなかったまま戻ってきたので、薫は「興ざめで、こんなことならむしろ使いなど出さねばよかった」と落胆する、という場面である。

動詞述語「帰り来」、移動動詞の〈一タリ〉の〈一eba条件形〉、〈一タレバ〉がしめすのは、時間関係として見れば、いいおわり文の「……と思す」という新しい認識や感情の発生に先行し、移動動詞のしめす語彙の意味「移動」の「完成」と、結果としての「到着・滞在」である。このつきそいあわせ文を、こころみにふたつのひとえ文に分割してみると、内容は、(0) 薫は使

いが戻って来るのを待っている。①「使いが、成果を得られず帰って来た」  
②「薫は落胆した」ということになるが、ひとえ文のままでは、①が時間的に先行し、後続する②が、①の次に起きたという継起的前進性を示すにとどまり、②の「落胆した」ことのわけとしては十分でないし、また①と②とがその〈原因〉〈理由〉－〈結果〉の関係にあることを積極的に示して結びつけてはいない。

条件づけをあらわすつきそいあわせ文は、場面の中で継起的に起こる一連の出来事や認識、感情の二つを取り上げ、緊密に結びつけ、そのことを「時間関係」とともに条件づける。その意味では、いいおわり文にさしだされる出来事や認識、感情についての、一種のフォーカス（焦点化）とも言いうる。

## 2) 【葵の上との不和、紫の上を邸から連れ出す】

君は大殿におはしけるに、例の女君、とみにも対面したまはず。ものむつかしくおぼえたまひて、あづまをすが搔きて、「常陸には田をこそつくれ」といふ歌を、声はいとなまめきて、すさびみたまへり。参りたれば、召し寄せてありさま問ひたまふ。しかじかなど聞こゆれば、口惜しう思して、……（源氏・若紫 326）

訳）源氏の君は大臣邸にいらっしゃったが、例によって女君はすぐにお逢いになるわけでもない。君はなんとなくおもしろくなくお感じになって、和琴を清搔（すがか）きにして「常陸には田をこそつくれ」という歌を、声はまことに優雅に、只ずさんでいらっしゃる。そこへ大夫（惟光）が参上したので、あちらの様子をお尋ねになる。しかじかで、と申しあげると、そんなことになったら残念とお思っている

この例も、前文に前提的な動作継続という〈状態〉として「すさびみたまへり」が、まず提示される。そこにあらたに生じた出来事「（惟光が）参りたれば」（移動動作の完成＝到着・滞在）をわけ、あるいはきっかけとして、光源氏は、惟光に（調べさせてきた）知りたいことを尋ねる。

すでにこの場面の前段として、光源氏は惟光に、紫の上の処遇について兵

部卿宮邸に遣わして意図を探らせていた。その惟光が戻って来たので、得た情報を聞こうとするのだが、このような場合、確かに現代語訳としては「戻って来たので」とするのがしっくりするが、それが時間的な継起性、すなわち〈契機〉をさしだしているのか、〈原因〉〈理由〉という因果関係をさしだしているのか判別はむずかしい。

もとより〈原因＝ので〉〈理由＝から〉や〈継起＝すると〉など、条件づけを表すむすびつきに形態的な対立をもつ現代日本語と異なり、古代日本語にはそのような形態的な対立がなく、分化していない。それゆえ、同じ〈-eba 条件形〉は、複数の機能を包含しつつ、そのどれが前面化するのかは文の他の要素や文脈に依存することになっていたのだろう。さらに言えば、ひとつが排他的に前面化していると言い切るには躊躇せざるをえないような、現代日本語から見ればあいまいな領域、あるいは重層しているあり方を認めざるをえないケースがあること、その両方を表していると見るべき用例があると、積極的に考えるべきなのだろう。〈-タリ〉が、そもそもパーフェクトという「時間」にかかわるサフィックスである以上、条件づけにおいても「時間」に関わる「先行→後続」の関係が基盤にあり、条件づけがその上に乗っかるようにして、つきそいあわせ文は成り立っていると見られる。

さらにもうひとつの観点から、この点についての説明をこころみる。1) 2) の例は語り文であり、登場人物の〈主観〉的表現ではない。だが、例えば2) の例において、光源氏の立場で「書き換え」てみると、「(事情を調べに行かせた) 惟光が戻って来たので／から、報告を聞きたくて尋ねた」ということになる。「戻って来た」という客観的事実と、光源氏の主観的な感情「報告を聞きたくて尋ねた」というむすびつきには、「戻って来た」という事実が先行しなければならない。そして語り手にとっては、語られる登場人物の主観的感情も、語られるべき物語内の出来事である。すなわち語りにおいて「客観化」されねばならない。語り手がふたつの出来事を条件づけながら語る、語り文のつきそいあわせ文においては、先行する出来事がいいおわり文の出来事の何らかの根拠をつとめるが、その条件づけにおいて、登場人物によるむすびつけと形態的には同じ〈-eba 条件形〉であり

ながら、語り手の「主観」が介在するわけではなく、それゆえどのようなむすびつけ方をしたのかは条件形の形態においてはしめされず、いわば痕跡しか残らないということだろう。

また、前文の〈状態〉は場面内の「現在」を示すが、それに続くつきそい文は〈タリ〉形、すなわちパーフェクトである以上、前文の示すテンポラルな位置に対して多少なりとも先行する開始限界達成やその動作の持続を含み的に持っており、その限りにおいて「部分的フラッシュバック」がある。

このような条件づけを基本的なあり方と見る。そして〈タリ〉は、そのパーフェクトという性質上、必然的にもう一つのあり方をもっている。

## （２）場面内の「現在」からさかのぼる「過去」をひきあいに出し、「現在」と関係づける場合

場面内に進行していく出来事や認識などがあり、その次に起きる出来事などと継起的な関係があるが、つきそい文にさしだされるのはその場面で新たに生起した出来事などではなく、「過去」の出来事の〈結果の状態〉や、人の性格やものの特性などの〈状態〉である場合がこれにあたる。

次の３）の例にはふたつの〈-eba 条件形〉がさしだされているが、ひとつめとふたつめでは場面の「現在」との関係が異なる。

### ３）【正月七日の夜、源氏、末摘花を訪れる】

日さし出づるほどにやすらひなして、出でたまふ。①東の妻戸押し開けたれば、②むかひたる廊の、上もなくあばれたれば、日の脚、ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけざやかに見入れらる。源氏・末摘花 377

訳）翌朝、日がのぼるころ、（光源氏は）わざとぐずぐずする様子を見せて、お立ちいでになる。①東の妻戸が押し開けてあったから、②正面の廊が屋根もなく荒れているので、日あしがじきに寝殿の中まで射し込んできて、少し降り積もった雪明りで、とてもはっきりと部屋の中までのぞきこめる。

〈-eba 条件形〉のつきそい文は、どちらもいいおわり文の「とてもはつきりと部屋の中まで見える」ことの〈原因〉をさしだしており、それは〈-タリ〉形がさしだす先行する〈結果の状態〉によってである。しかし、①の「押し開ける」は、昨夜か今朝に「妻戸を押し開けてあった」という〈結果の状態〉だが、②「屋根もなく荒れている」のは、この末摘花邸においてはかなり以前からの荒廃ぶりという〈結果の状態〉であって、この場面に直接する連続的・継起的な関係はない。また、この①②には「先行→後続」というタクシス関係もなく、出来事の生起としては逆順である。あえて言えば、光源氏の邸内の移動に沿って知覚・認識した順とするのが妥当と言えるのではないか。

語り文が、登場人物の行動や場面の中の出来事の時間軸に沿って語るというのは基本的なあり方だが、ここでは、基盤になっているのは人物の移動という出来事ではあるが、人物の知覚や認識の時間軸に沿って語るというあり方も認めるということによいのではないだろうか。

#### 4) 【内大臣腰結役をつとめる 源氏と歌の贈答】

内大臣は、さしも急がれたまふまじき御心なれど、めづらかに聞きたまうし後は、いつしかと御心にかかりたれば、とく参りたまへり。

源氏・行幸 308

訳) 内大臣は、かつてはさほどお急ぎになる気持ちでもなかったのだが、思いもよらぬ話として真相をお聞きになってからは、早く姫君に会いたいものと、そのことが心を離れないので、当日早めに参上なされた。

内大臣は前年、光源氏が養女としている女君・玉鬘の裳着の腰結役を依頼されたが、一度断った。その後、実は玉鬘が自分の実子であることを知らされ承諾した。そして裳着の当日「早めに参上した」わけが、つきそい文にある「心を離れないようになっている」という〈結果の状態〉である。真相を知らされたのは「二月朔日」であり、裳着は「十六日」と語られるように、当日の内大臣の行動の「現在」にとって「過去」に知らされた真相が

「心を離れない」という〈結果の状態〉の「現在」までの持続が、語り文において、つまり語り手の主観は介在しない〈原因〉として（登場人物の心情表現として主観的なものなら〈理由〉として）語られる。

ならば、語り文においては、あるいは語り手にとっては、登場人物の主観的な〈理由—結果〉のむすびつきも、語り手の主観ではない以上、対象としてながめられる出来事であって、〈原因—結果〉のむすびつきとしてさしだされるということなのであろう。

#### 5) 【明石の浦を出立 大堰の邸に移り住む】

思ふ方の風にて、限りける日違へず入りたまひぬ。（中略）家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず。昔のこと思い出でられて、あはれなること多かり。源氏・松風 397

訳）順風が吹いて、かねて決めてあった日に違えず、京にお入りになった。（中略）家の様子も趣深く、長年過ごしてきた海辺に似ているので、場所の変わったような気持もしない。しぜん昔のことが思い出されてきて、しみりとした気持になることが多い。

明石の地を出て、京近くの大堰に移り住んだ直後の、明石の君らの描写である。つきそい文に、長期にわたる「過去」が想起され、それを「理由」として「現在」の認識、感情が生起する。

いいおわり文「心地もせず」は敬語が消失しており、自由間接言説的である。自由間接言説として登場人物の声と語り手の声の二重性を認めるならば、この語り文の中にある条件づけも、登場人物の主観性〈理由〉と、語り手による客観性〈原因〉とが未分化のままであることを認めるべきであらう。

#### 6) 【薫、執心を抑えて、中の君をよく後見する】

御覽ぜさせねど、さきざきも、かやうなる御心しらひは常の事にて目馴れにたれば、気色ばみ返しなどひこじろふべきにもあらねば、いかがとも思ひわづらはで、人々にとり散らしなどしたれば、おのおのさ

し縫ひなどす。源氏・宿木 428

訳) いちいちごらんに入れないけれども、以前からこうしたお心づかいにはいつものこととて慣れているので、いまさらかどかどしくお返ししたりなどこだわるべきでもないのだから、どうしたものか気をつかうこともせず人々に配ったりなどして、めいめいで仕立てたりする。

中の君への後見のひとつとして、薫は装束のための多くの布地を贈る。そのような援助は「さきざきも」あって「慣れている」ので、気にせず皆に配ったという。布地が贈られてきたという新しい事態の「現在」に対して、「さきざきも」「常の事」というように習慣化して「目慣れ」ているという「過去」が引き合いにさしだされ、いいおわり文の「布地の配布」のわけをさしだしている。このつきそい文の動詞述語は「目慣る」に「ぬ」「たり」というサフィックスを伴っていて、〈一タリ〉である。いったん分離し「目馴れぬ」と「たり」としておく。

「目馴れぬ」は「目慣る」という〈変化〉をその意味としている。古代語の〈変化動詞〉には、現代語と異なり、内的時間があり、持続、進行してゆく変化、例えば人間の成長を表す「ねびまさる」や植物の紅葉を意味する「色づく」などでは、〈一ヌ〉形は開始限界達成性をさしだすサフィックスであるのに、「変化の始まり」ではなく、「変化の達成された状態の始まり」、あるいは「変化がある程度への到達したという始まり」がさしだされる例が圧倒的に多い。人が「ねびまさりぬ」、紅葉が「色づきぬ」というのは、「成長」や「紅葉」という「変化の始まり」、語彙的意味の開始限界達成ではなく、「十分にそう表現してかまわない程度に到達した状態の始まり」をさしだしている。

この「目慣れた状態の達成・開始」に〈一タリ〉がくつつき、「先行完成」と「後続する結果の状態」としての「目慣れた状態」とが複合していると見られるが、これは当然、時間軸上で重なっており、このような競合においては、〈一タリ〉の機能と相対的に〈一ヌ〉のしめす「限界局面化」は、「目慣れた状態の達成」は既にはっきりとあって、それ以前の「目慣れていない時

期の人々の状態」とは時間的局面が異なることを際立たせることになっているのではないか。学校文法で「ぬ」（終了限界達成の「つ」も）に「強意」の意味を与えているのは、このような「限界局面」を焦点化していることに対応しているのであろう。

## まとめ

語り文において、物語が時間を進行させながら語り進める中で、複数の出来事の生起や認識、感情の生起が結びつけられ関係づけられるとき、その関係づけが、条件づけをあらわすつきそいあわせ文によって表現されることがある。そして〈-eba 条件形〉つきそい文に組み込まれる動詞述語文の〈-タリ〉形は、時間表現（先行完成性と後続する結果の状態）であることを基盤としながら、〈原因〉〈理由〉〈契機〉という条件づけへも参与する。しかし、現代日本語のように「ので」「から」「すると」などに形態的に分化していないゆえに、これら、古代日本語ではこれらが複合的な状態であられることもしばしばある。

この条件づけは、語り文においては、登場人物にとって主観的な結びつきであっても、その登場人物の主観的な結びつけに語り手は関与していない以上、対象として客観的な条件づけとしてさしだされる。登場人物にとっての主観的な〈理由〉の条件づけが語り文として語られると、その現代語訳がしばしば〈原因〉の「-ので」と訳されているのは、このためだと考えられる。

さらに語りにおいて、自由間接言説となっている場合は、語り手と登場人物の二声的言説であるために、登場人物の主観的〈理由〉であり、同時に語り手によって客観化された〈原因〉〈契機〉でもあるという重層的なあり方も認められるべきと考える。

《参考文献》

- 秋山虔他『日本古典文学全集 源氏物語』小学館
- 奥田靖雄 1984「おしはかり (一)」『日本語学』12月号、明治書院
- ―― 1985「おしはかり (二)」『日本語学』2月号、明治書院
- ―― 1986「条件づけを表現するつきそい・あわせ文―その体系性をめぐって―」『教育国語』87号 むぎ書房
- ―― 1993「動詞の終止形 (その1)」『教育国語』第2期9号 むぎ書房
- ―― 1993「動詞の終止形 (その2)」『教育国語』第2期9号 むぎ書房
- ―― 1993「動詞の終止形(その4)―テンス―」教科研国語部会講義プリント
- ―― 1994「動詞の終止形 (その3)」『教育国語』第2期13号 むぎ書房
- 工藤真由美 2014『現代日本語ムード・テンス・アспект論』ひつじ書房
- 言語学研究会・構文論グループ 1985a「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (1)」『教育国語』81号 むぎ書房
- ―― 1985b「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (2)」『教育国語』82号 むぎ書房
- ―― 1985c「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (3)」『教育国語』83号 むぎ書房
- ―― 1985d「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (4)」『教育国語』84号 むぎ書房
- ―― 1988「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文(1)」『教育国語』92号 むぎ書房
- ―― 1988「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文(2)」『教育国語』93号 むぎ書房
- ―― 1988「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文(3)」『教育国語』94号 むぎ書房
- ―― 1988「時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文(4)」『教育国語』95号 むぎ書房
- 鈴木泰 2012『古典日本語の時間表現』笠間書院